

# 佐藤敏郎

元宮城県中学校国語教師・小さな命の意味を考える会代表



20代、30代の若者たちが運営するNPOにあって、52歳の頼れるお兄さん

## 子どもに居場所を 大人にたまり場を

あの日、凍える寒さの中、津波にのまれてしまった子どもたち。なぜ裏山に逃げなかったのか。なぜ。教師としての立場と遺族としての思いの間での葛藤の末、悲劇と防災の「語り部」になった。今日まで、そして明日から。何かが始まる予感とともに。

文 神山典士 写真 東川哲也

震災時、約50の支援プロジェクトからなる日本最大級のボランティアグループの代表を務めた早稲田大学大学院客員准教授の西條剛史には、被災地で出会った中学校教諭(当時)佐藤敏郎(52)に対して強烈な記憶がある。

「被災地の多くのリーダーの中でも敏郎先生はダントツで凄い。大川小学校の遺族の一人として、色々な意見がある中でも、子どもたちの命に恥ずかしくないことをしていくという視点が決まっておれない。静かだけれど強い影響力がある人です」

今年3月、新聞にも佐藤の記事が出た。「防災のあり方を問い続ける東松島市立矢本第二中学校の国語教諭佐藤敏郎さん(51)」が、3月末日で教職を離れる。今後は被災地支援のNPOで活動しながら、大川小の惨事と正面から向き合っていく考えだ(2015年3月25日付朝日新聞)

なぜ一介の教職員の退職がニュースなのか? 震災後の石巻市、女川町での取材経験豊富な毎日新聞記者、百武信幸(ひやくたけのぶゆき)はこう語る。

「敏郎先生は教師でありながら遺族として市の教育委員会と話し合いを重ねたし、震災時に勤務していた女川一中では被災体験を俳句に詠む素晴らしい授業を展開した。女川さいがいFMでは「大人のたまり場」という番組を持ってギターを弾きながら歌っている。地元では、28年間の教員生活

を通して色々な顔を持った人気者なんです」

退職後の佐藤を追って女川町を訪ねると……

### 「通りすがりさん」と歌う 震災の日の夜空の星

「おいみんな、もっと授業に集中しよー」

約10人の小学校5年生に佐藤が声をかける。ここは元女川第一小学校の教室。今は首都圏を中心に高校生のキャリア教育を実践する認定NPO法人カタリバが、震災直後から「子どもの居場所」をテーマに女川町教育委員会と提携して開くコラボスクール女川向学館だ。

午後4時。学校の授業を終えた子どもたちが、スクールバスでやってくる。佐藤は4月から向学館のアドバイザーに就任した。授業時間は70分。子どもたちの約半数は狭い仮設住宅に住み、ここで宿題やドリルを「家庭学習」する。

授業中でも時折脱線してしまう子どもたちを見ながら、佐藤はこう語る。

「この子どもたちは震災直後に入学した世代で、いろいろ配慮が必要です。学校では厳しく指導を受けているから、ここでは高圧的な注意はしないほうがいい。子どもたちの『居場所』ですから」

向学館が出すチラシやブログに、佐藤は4コマ漫画「帰ってきたまなぶくん」の連載を始めた。このキャラクターは、02年から3年間、佐藤が町社会教育主事時代に町民向けの「情報かわら版」に連載していたもの。その後05年から9年間勤務した女川第一中学校(現女川中学校)でも、授業中やお知らせの紙面に登場していた。

向学館代表の鶴賀康久はこう語る。

「保護者はこのキャラクターを見ただけで、敏郎先生が向学館に参加したことがわかって安心してくれるはず。ほくらにしても心強い存在です」

その夜午後7時。佐藤はギターを抱えて、女川小学校校庭脇にあるトレーラーハウスにいた。

ここは震災の約2週間後からボランティアスタッフが集まって放送を始めた「女川さいがいFM」の仮設スタジオ。佐藤は14年の春から週に一度、「牡鹿半島フォークジャンボリー 佐藤敏郎の大人のたまり場」という番組を持っている。アシスタントの宮里彩佳が、スタジオに入った「通りすがりさん」と呼ばれる男女3人に声をかける。

「今日のテーマは『星』です。中島みゆきの『地上の星』は皆さんで歌いますか?」

「なんだ、やっべし」

佐藤が演奏を始め、4人での合唱が始まった。元女川一中PTAのじゅんこさん、震災後「き



被災を免れた自宅は2世帯住居。中央の広いリビングには来客が絶えない。妻のかつらも佐藤の活動に理解を示す。母きよとかつらの手料理が大好評

ぼうのかね商店街」で喫茶店「セボラ」を開く堂賀さん、地元サッカークラブ「コバルトレ女川」の応援団長とっさんが、即席でも息の合ったコーラスを響かせる。じゅんこさんが言う。

「敏郎先生は社会教育主事時代にも『大人のたまり場』という講座を持ってフォークや歌謡曲を歌っていました。それが震災後に復活したんです」

佐藤は女川一中時代にも野球部やバレー部の顧問を務め、保護者にも顔が広い。「通りすがってくるのは、そういう仲間たちだ」。

佐藤がリスナーに語りかける。

「震災の深夜は星が悔しいくらいに綺麗でした。子どもたちもそのことはよく覚えていました」

この日に限らず、佐藤のスケジュール帳は真っ黒だ。翌日は事務局長を務めるNPO「キッズ・ナウ・ジャパン」の仕事で千葉県へ。翌々日午前

は向学館でスカイプを使ったスタッフ会議、午後には仙台市内で打ち合わせ。その他にも防災をテーマにした講演会の講師や、大川小学校跡地を訪ねる人のためのガイドなど、多彩な仕事を務める。「教員時代も楽しかったですが、いまは色々な人に出会えて充実しています」と、笑顔をつくる。

学校や市教委からは、一向に事実解明の知らせがない。遺族たちは夜ごと佐藤家に集まって話し合うようになる。佐藤家は、父・文志が旧河北町の助役を務めていたから、元々人が集まりやすい。やがて報道陣もやってくるようになり、佐藤家は情報が集散する記者クラブのようにもなる。

### 「51分間の真実」を追求 小さな命を中心に考える

「ミコーが遺体で見つかったって」

震災の2日後、女川一中で被災し、避難してきた町民たちや子どもたちの世話で学校に泊まり込んでいた佐藤の目の前で、自宅からやってきた妻のかつらが泣き崩れた。大川小学校6年生だった次女のみずほを含めた約80人もの児童と教員が、校庭から逃げ遅れて津波にのまれた。

翌朝早く、佐藤夫妻が車と船を乗り継いで大川小近くの三角地帯に辿り着いてみると、約30人の子どもの遺体が並ぶ地獄絵図が広がっていた。

「みずほは眠るような表情でした。妻が顔を拭いたら右目から涙を流した。5日後の火葬の日まで、毎日涙を流していました」

なぜ裏山に逃げなかったのか。なぜ51分間も校庭に留まったのか。その時教師たちは何を考えどんな指示を出した（出さなかった）のか。

「現実を受け止めることから始まるんだ。子どもたちは必死に受け止めようとしているのに。佐藤の苛立ちは、一向に事実を受け止めようとならない市教委の対応に向かった」

ここでも心は解放されない。

一つの契機は12年6月、一向に進展しない状況を前に遺族が初めて記者会見を開き、メディアの前で発言すると決意した時のことだった。

「敏郎さん、記者会見の真ん中で発言してくれ」仲間たちから懇願されて、佐藤は悩んだ。それまで佐藤は、極力メディアには出ないようにしていた。けれどこの時、佐藤は考えた。

あの雪の降り出した寒い日に、校庭で51分間も恐怖に震えていた子どもたち。何人かの子は「山へ逃げよう」と言った。だが信頼する先生は「危ないから駄目だ」と、校庭から動こうとしない。

その時の子どもたちの恐怖を思い、小さな命を中心に考えなければ――。

佐藤が出した結論は、「出席と発言」だった。

### 立場を超えて話したい 何かが始まる予感

記者会見の前日、佐藤は女川町の教育長、校長、PTA会長らに電話をかけた。

「私は明日開かれる遺族記者会見に参加して発言しようと思います。ご迷惑をおかけすることになるとは思いますが、お許しください」

だがこの時、誰もが言った。

「遠慮すんな。信念を持ってやってこい」

後日、この時のことを話したFM番組で、佐藤は涙を浮かべ言葉をつまらせた。

「あの時は女川の皆さんに救われました。本当に感謝しています――」

その前年、佐藤にはもう一つの出会いがあった。11年の7月。女川町の教育長（当時）遠藤定治にコラボスクールの開校を直訴し、それを認めら

れたNPOカタリバ代表の今村久美は、東京と被災地を往復しながら開設準備に当たっていた。文部科学省に報告に行くと、旧知の文科副大臣（当時）鈴木寛から被災地の案内を頼まれた。山積する課題に対して人々の「熟議」を提案していた鈴木は、被災者との対面を渴望していたのだ。

女川での熟議の場は女川第二小学校（当時）の理科室。県と町の教委、PTA、教員、関係者等約40人の参加者の中に佐藤がいた。こう振り返る。「あの頃はガレキ撤去や道路の復旧で手一杯だったのに、子どもたちの教育について語り合おうという姿勢は素晴らしいと思いました」

佐藤は、関係者が立場を超えて議論を交わす場に感動した。なぜならその頃、遺族内からは「これ以上市教委と話し合っても仕方ない」という意見が出て、その絆はずたずたになっていたからだ。熟議の終了後、佐藤は思わず鈴木に駆け寄り、涙ながらに大川小の現実を訴えた。

「私たちは立場を超えて対話したい。真実を究明したい。それだけなんです」――。

この時が佐藤と「カタリバ」との出会いだった。「あの若者たちはいったい何者なのか。何かが始まる予感がした」と、後に佐藤は向学館のブログに当時から振り返って書いている。

向学館の開校は熟議翌日の7月4日。それ以降カタリバのスタッフたちはしばしば中学校に顔を出し、教員と対話を重ねた。佐藤には、若い彼らとのやりとりが新鮮だった。

「カタリバのスタッフは私たちに、あの子の様子が気になる、この場合どう指導したらいいのかと熱心に聞いてきて、情報交換が始まりました」

学校現場では、細々とした仕事や会議、教員組織の役割分担があり、教員が子どもたちと正面から向きあう時間はなかなか取れないのが現状だ。



自宅アトリエにはギター、楽譜、プロマイド、LPレコード、ポスターなどがぎっしり。仲間たちとPSNというバンドを組む。吉田拓郎以降のフォークソングが大好き。作詞作曲も手がける

■さとうとしろう

- 1963年 8月、宮城県河北町（現在は石巻市）生まれ。
- 76年 河北町立大川中学校時代に出会った先生に影響を受け、教師になりたいと考える。ギターを始める。生徒会長を務める。
- 79年 宮城県石巻高校入学。バレーボール部に入るが、腰を痛め美術部に転部。油絵を描き、県展で入選。また、河北町のジュニアリーダーサークルに所属。後輩たちの面倒を見る。大川小学校遺族会の中にも、当時の後輩たちが多数いる。
- 82年 受験に失敗し浪人。予備校では「自称レクリエーション係」として、芋煮会やゲーム大会を企画するなど、勉強以外で力を発揮。明るい性格で愛されるキャラクターだった。
- 83年 宮城教育大学入学。
- 87年 雄勝町（現在は石巻市）立大須中学校に国語教師として赴任。女子バレー部の顧問となり部活動に明け暮れた。妻かつらとは同僚としてここで出会う。
- 90年 石巻市立青葉中学校に赴任。生徒会担当として色々なイベントを企画。部活動は男子バレー部で、市中総体4連覇、県3位になる。
- 97年 石巻市立門脇中学校赴任。やんちゃな子どもたちを相手に、バレーボールとギターと歌で胸襟を開いて語り合う。生徒指導だよりに4コマ漫画「さわやかくん」の連載開始。
- 2002年 県の社会教育主事として女川町生涯学習課（公民館）に派遣される。子どもから高齢者までを対象に幅広い教育活動に携わる。「大人のたまり場」を企画。4コマ漫画「さわやかまなぶくん」の連載開始。
- 05年 女川第一中学校赴任。顧問は野球部。地域と一体となって練習を重ね県3位まで進出。10年からは男子バレー部顧問。
- 11年 東日本大震災。
- 12年 宮城県が新設した防災担当主幹教諭に。防災マニュアルを見直し、大川小学校の体験を盛り込んだものを作る。
- 13年 11月、「小さな命の意味を考える会」立ちあげ。
- 14年 東松島市立矢本第二中学校に防災担当主幹教諭として赴任。
- 15年 3月、仙台で開かれた国連防災世界会議において「小さな命の意味を考える」フォーラムを主催。定員をはるかに超える330人の参加を得る。3月末、教職を離れる。現在はNPO、ラジオ、音楽など幅広く活動を展開中。

14年2月にまとまった、文科省が主導した第三者検証委員会の最終報告書は200ページ以上あった。けれど何度読んでも「仕方なかった」という結論に読めてしまう。子どもたちが書いた17文

原告団に入らない決断をしました」

「震災から3年間、市教委や検証委員会との話はすれ違いばかりでした。私は中学生にもわかる言葉で話し合いたい。それは裁判では難しいと思いい、原告団に入らない決断をしました」

佐藤が遺族の仲間たちの前でそう告げたのは、14年3月のことだった。3年間の時効ぎりぎりのタイミングで、19組の遺族は「市と県を提訴」と覚悟を決めた。けれど佐藤はそこに入らなかった。その理由をこう語る。

「何かが始まって」いたのだ。「オレは裁判から降りる。別のやり方で大川小のことを語っていくから」

50歳を迎えた佐藤には管理職への期待もかかり、それも悩みの種だった。こう振り返る。「各地から防災をテーマにした講演を頼まれても、学校との兼ね合いで難しいことも多く、私がいまやるべきことはなんなんだ、どちらかに専念するべきではと思うようになりました」

佐藤の胸の中で、「何かが始まって」いたのだ。「オレは裁判から降りる。別のやり方で大川小のことを語っていくから」

字の俳句の方がはるかに説得力がある。佐藤はカタリバの今村たちにメールを打った。「今度の3月で教職を離れようと思っています」

「語り部」になることが、佐藤の結論だった。「ではぜひカタリバに参加していただいで、若いスタッフにその体験を語っていただけませんか」今村からの誘いを断る理由はなかった。

裏庭に咲く6輪のひまわり  
それぞれの役割で頑張る

裁判の原告となった遺族仲間の一人、紫桃隆洋は、佐藤の離脱に対してこう語った。「敏郎さんは4年間つらかったべねえ。原告団には入らなくても、オレたちは枝は違っても同じ木であることは変わらねえから。大川小の悲劇を伝えるために、敏郎さんの発言力は大切だから」

実は紫桃たちは、取材があるたびに報道陣に「敏郎さんを取り上げてくれ」と繰り返してきた。教育現場で佐藤が潰されないために、報道を通して

世論で守る方法を考えていたのだ。震災の年の夏から毎年、佐藤家では不思議なことが起こる。裏庭に、地区で亡くなった6人の子どもたちと同数の、異なる形のひまわりが咲くようになった。遺族たちは当初、「子どもたちが帰ってきた」と喜んだ。けれどいつからか、「親たちもそれぞれの役割でがんばれと子どもたちが言っている」と思うようになった。

神山典士  
1960年、埼玉生まれ。ノンフィクション作家。信州大学人文学部卒。近著に「ベテランと天才」佐村河内事件の全貌、「ゴーストライター論」第45回大宅壮一ノンフィクション賞（雑誌部門）受賞。

「今の生活はみずほが一番喜んでくれていると思います。みずほが色々な人に出会わせてくれる。ミーコの笑顔が目に浮かびます」

女川さいがいFMで遺族としての心情を語った時、佐藤は大好きな吉田拓郎の「今日までそして明日から」をリクエストした。被災地に、自分の胸に、みずほのために、その歌声が響く。

「そして今わたしは思っています 明日からもこうして生きて行くだろうと」

佐藤はこう語る。

「今度の3月で教職を離れようと思っています」

「語り部」になることが、佐藤の結論だった。「ではぜひカタリバに参加していただいで、若いスタッフにその体験を語っていただけませんか」今村からの誘いを断る理由はなかった。

世論で守る方法を考えていたのだ。震災の年の夏から毎年、佐藤家では不思議なことが起こる。裏庭に、地区で亡くなった6人の子どもたちと同数の、異なる形のひまわりが咲くようになった。遺族たちは当初、「子どもたちが帰ってきた」と喜んだ。けれどいつからか、「親たちもそれぞれの役割でがんばれと子どもたちが言っている」と思うようになった。